

# TEEP

進化型実務家教員  
養成プログラム

VOL.33

NEWS LETTER

TEEP 進化型実務家教員  
養成プログラム

NEWS LETTER

VOL.33

発行者 TEEPコンソーシアム実施委員会 事務局 名古屋市立大学教務企画室内 〒467-8501 名古屋市瑞穂区瑞穂町字山の畑1  
発行日 2022年11月1日 連絡先 E-mail: teep\_office@sec.nagoya-cu.ac.jp

中京大学スポーツ科学部では、進化型実務家教員養成プログラム(TEEP)の専門コースの一つ「スポーツ実務コース」を開講しています。全国大会レベル以上の競技実績や特定の競技における指導経験、またはスポーツ・体育・保健に関する教育や行政に関する実務経験が5年以上ある方を対象に、スポーツ実技担当の大学教職員に求められる指導力等の養成を目的としたカリキュラムを提供しています。今回は中京大学スポーツ科学部長の種田行男先生に実務家教員に求められる役割をお聞きするとともに、同じくスポーツ科学部で実務家としての経験をいかして活躍されている葛原憲治先生と後藤晃伸先生にお話を伺いました。(文・稲葉泰嗣)

## スポーツ実務コース・対談



中京大学  
スポーツ科学部長  
種田行男さん



中京大学  
スポーツ科学部 教授  
葛原憲治さん



中京大学  
スポーツ科学部 准教授  
後藤晃伸さん



中京大学  
スポーツ科学部 任期制助手  
稲葉泰嗣さん

ファシリテーター

## アスリートの育成から インフラ整備まで

稲葉 最初に種田先生から、スポーツの分野において実務家教員が求められている背景や、実務家教員に対する期待についてお話しいただけます。

種田 一つにはトップアスリートの強化や育成ができる人材のニーズがあります。

アスリート育成のためには、科学的根拠に基づいたパフォーマンス向上のための理論を幅広く身に付けていることが必要です。スポーツ生理学、生化学といったフィジカル(身体)面はもちろん、心理学に基づいたメンタル面のコントロールのための理論も大切です。加えて競技種目ごとのスキルに関わる理論も必須です。

指導者はこうした理論を実践で応用できなければなりません。フィジカル・メンタル両面のコンディションを整え、試合・大会でベストパフォーマンスを発

稲葉 現場での経験を伝える際に工夫されていることや、注意されていることを教えていただけますか。

後藤 トライアンドエラーを繰り返させることでですね。効果的な教授方法はよく紹介されていますが、いつも上手くいくとは限りません。むしろ上手くいかないケースの方が多いため、[成功例に当てはまらないケース]を模擬授業などで体験させています。生徒役の学生に居眠りをしてもらったり、スマホを触ってもらったりして、教師役の学生に想定外のケースにどう対応するかを考えさせる、といったこともしています。

これらもやはり理論的なことを講義で学んでいることが前提となります。基礎知識がないまま実習に行っても、何を見てくればいいのか分かりません。しかし事前に準備していれば、学生たちは多様な視点で多くのことを学んでくれます。

稲葉 現場とのつながりがある実務家教員であるからこそできる教育方法であると感じました。お二人の先生から、スポーツの強化、育成に関する指導について、実務家教員の強みをお話いただきました。

## スポーツを軸に 多分野をつなぐ実務家教員に

稲葉 スポーツの普及やインフラの整備という点では、地域や行政、企業との連携も重要になると考えられます。多職種との連携という面で実務家教員に期待されることはありますか。

種田 行政の施策に代表されるように、日本ではスポーツに関する取り組みは縦割りになっていることが多いです。健康面では厚生労働省、教育面では文部科学省というように。

しかし世界の潮流としては、スポーツを通じてさまざまな分野がそれぞれの目標を達成するために

連携して活動することが提唱されています。例えば、目的地までの移動に車を使わず徒歩で行きましようという活動は、身体活動量の増加が「生活習慣病の発症を予防」しますし、「低炭素社会を作りたい」と考える人たちの共感も得られるわけです。

スポーツを軸にしつつも、スポーツの分野のみにとどまることなく多分野とのネットワークを作っていく。実務家教員は研究者でもありますから、科学的根拠に基づいて行政と連携して政策を作ることでも可能でしょうし、さまざまな分野をつなぐコーディネーターとしての役割も期待できると考えています。

稲葉 専門コースに進む前のTEEP基本コースでは「ソーシャルデザイン」という科目があり、多分野連携に必要なファシリテーションも学びます。スポーツ実務コースを修了された方が、スポーツを切り口に社会を変えていく活躍をされる可能性を感じました。

本日はありがとうございました。

## 中京大学 稲葉先生による 専門コース(スポーツ実務)紹介!

### ▶どんな人に受講してもらいたい?

- ①高い競技力を目指すアスリートへ指導する人
- ②小学校～高校までの育成年代へスポーツ指導をする人
- ③健康の維持増進のための生涯スポーツや教育現場における体育指導をする人

### ▶どんなことが身に付けられる?

スポーツの強化・育成・普及において指導者に求められる理論、実技指導力、スポーツ科学に関する基礎的能力

### ▶どんな指導者をめざす?

- ①現代社会における多様化・複雑化したスポーツへの期待とニーズを分かり易く解説できる
- ②確かな理論や技能及び指導方法等と実践を結びつけて指導できる
- ③リーダーシップを持ち、関係者をまとめて地域スポーツ環境の改善をコーディネートできる

11月16日(水)に「2022年度TEEPシンポジウム 及び 専門コースワークショップ」を開催いたします。詳細については、Webサイトにのご案内させていただきます。

<https://teep-consortium.jp/>



揮させられる力が求められます。実務家教員には、スポーツ現場での豊富な指導経験とスポーツ科学の研究業績を活用してトップアスリートを育てることが期待されています。

また「スポーツの普及」においても実務家教員は求められています。子どもの運動能力の低下や高齢者の自立能力の喪失、労働者の身体的・精神的負担の増加など、健康に関する課題は社会に山積しています。小中学生への体育授業や課外活動、自治体や企業においてもスポーツや健康に関する指導のニーズが高まる中、研究業績と実務経験をいかして運動の習慣のない人にもスポーツの意義や楽しさを伝えられる人が、ますます必要とされています。

さらに「スポーツ環境の整備」においても実務家教員の力が発揮されると考えています。競技場や公園などのスポーツ施設を、どこにどう建設するのか。インフラ整備や都市計画においても「スポーツが楽しめるまち」を住民に提供することができるわけです。こうした施設の運営には、スポーツビジネスやマーケティングができる人材も求められています。スポーツ経験がある方が実務家教員となり、広くその知見を伝えられれば、スポーツを楽しむ市民をより増やすことができると私は考えています。

## 実践を通じて学生の自立をサポート

**稲葉** スポーツに関わる分野で広く実務家教員が求められていることが分かりました。

では、実際にトップアスリート育成の経験を活かして中京大学で教鞭をとられている葛原憲治先生にお話を伺います。

**葛原** 私の専門はストレンクス&コンディショニングとアスレティックトレーニングです。アメリカの大学院への進学をきっかけに、現地で学生スポーツのトレーナーや競技大会のメディカルスタッフを経験しました。帰国後はプロ野球や企業スポーツチームのトレーナーを務めたのち、大学教員となりました。

教員になった時、大きな戸惑いを感じたことがあります。多くの私立大学が「面倒見の良さ」を売りにしていますが、教職員が学生たちにお膳立てをし過ぎて、かえって学生の自立を妨げているかと疑問を持ったのです。私は学生たちが自ら考え、課題を解決する機会を重視しています。

ゼミナールでの現場実習では、それぞれの学生の目標に合わせて実習現場を選ばせ、講義で学んだ知識を応用力や知恵に変え、社会での実践力を身に付けてもらいます。

大学サッカー部でトレーナーとして実習を行う学生は、GPSデバイスを装着した選手の動きから得られるデータを測定し、分析結果をチームにフィードバックしています。

以前に高校の野球部で実習を行った学生は、練習メニューの作成や実技指導を行いました。実績が評価され、卒業後はその学校で保健体育の教諭で採用され、野球部のコーチを務めるまでになっています。



大学サッカー部でのトレーナー実習

実習に加え「コーポレートフィットネス」のプロジェクトにも取り組んでいます。「健康経営」に注目が集まる中、福利厚生の一環として従業員向けに肩こりや腰痛を改善するエクササイズ・プログラムを学生たちが考案し、企業に提案するというものです。

ただ、プログラムを考えるとところまではできたのですが、実際に企業にプレゼンすることはできませんでした。しかし、このように実践力を高める指導や、現場の課題を探求し、問題解決につなげる研究が実務家教員の強みであると感じています。

**稲葉** ありがとうございます。企業へのプレゼンができなかったのは、なぜでしょうか。

**葛原** 学生が企業にアポイントを取るのですが、「検討して連絡します」と言われると、鶏呑みにしてずっと待つてしまったのです。もう一歩踏み込むことができなかった。こうした場合に教員として学生をどうサポートするかは、今後の私自身の課題でもあります。

**稲葉** TEEPの指導者の中には、ゼミで社会課題を解決するためのアイデアを企業に提案しておられる先生がいます。教員が依頼書や企画書のチェックを行うとともに、タイムキーパーとなって進捗を確認することが重要だそうです。社会人経験のない学生と、提案を受ける企業側のレベル感を合わせる役割も、実務家教員に求められているのでしょうか。他にも実習で心掛けておられることはありますか？

**葛原** 大学教員になったばかりの頃、競技レベルの高いチームで実習すれば学びが大きいと考え、国内のトップチームに学生を送り込みました。しかし多くの学生が途中でフェードアウトしてしまったのです。トップチームであれば学生にも相応のレベルを求められます。学生にとってはそれが大きな負担でもあったのだと思います。この経験から、現在は学生自身が自分の身の丈に合った実習先を探すことから始めています。実習後、さらに学びたいという学生にはより専門的な実習先を紹介する、という段階を経るようにしています。

**稲葉** あまり遠すぎる目標では学習にならないということですね。教員として学生の知識や技術に合わせて少し背伸びするぐらいの領域を想定すること、また、自分で探すことは当事者意識が持てる重要な出発の仕方だと思います。

## 理論と実践の両方を伝えていく

**稲葉** 葛原先生は実務経験を基に、学生が学んだ知識を知恵に変え実践していく力を付ける指導をされているんですね。続いては、教育の分野で幅広い経験をお持ちであり、現在は中京大学にて保健体育の指導方法について教鞭を取られている後藤先生にお話を伺います。

**後藤** 私は以前高校で保健体育の教員をしておりました。その経験や生徒たちとの出会いが私の人生を大きく変えました。

教員になって10年ほど経った時、赴任校が国立教育政策研究所の研究指定校となり、3年間の実践研究を行いました。文部科学省の教科調査官から直接指導していただき、国の教育政策の動向なども踏まえた多角的な視点を持てるようになりました。

生徒たちを教えながら、行政のオーダーにも応える実践を繰り返すうちに、自分がまだ知らないこと、学ぶべきことが山のようにあると気づきました。特に当時の私が力不足だと感じたことは、統計的な分析の手法です。これを学び直したいと考えたことが大学院進学へのきっかけの一つです。また、その頃に勤務していた夜間定時制高校では、「昼間は働き、夜は学校」という生徒たちを目の当たりにしました。その大変さを自分も経験しながら生徒と向き合いたいという思いもあり、「昼間は学校、夜は仕事」という選択をしました。

大学院修了と同時に教育委員会に異動になり、これまでとは違った視点で自分の成すべきことを考えるようになりました。これまでに学ばせてもらったことを自分だけのものにしたままでいいのか、学びの機会を与えてもらった恩は未来ある若者に返していくべきではないかと考えるようになり、大学教員になりました。私が経験してきたことを伝えた学生たちが、どのように成長してくれるのかを想像すると、ワクワクします。

まだ大学で教えて2年目ですが、ゼミや講義で理論に絡めて教育現場での経験を話すと、学生たちは目を輝かせて聞いてくれます。リアルな現場のことをこんなにも知りたいのだと感じると同時に、やはりそれを裏付ける理論と一緒に話すからこそ学習効果が高まるのだとも思います。

また、教員として勤務していた経験を生かし、知り合いの先生方に実習の受け入れもお願いしています。学生に現場で学ぶ機会を作れることも、実務家教員である自分の強みだと思っています。

大学ではさまざまな理論を学びますが、現場では理論に当てはまらないケースに出会うこともたくさんあります。そうした実践での難しさを、私の経験も踏まえて伝え、学生たちに考えてもらうことが必要だと考えています。



ゼミ授業の様子